

女性の顔を持つウクライナ：
歴史的な伝統，社会規範，
メディアでのイメージと最近のトレンド

オリガ・ホメンコ

神戸学院経済学論集

第52巻 第3・4号 抜刷

令和3年3月発行

女性の顔を持つウクライナ： 歴史的な伝統，社会規範， メディアでのイメージと最近のトレンド

オリガ・ホメンコ⁽¹⁾

はじめに

現在のウクライナの人口4千300万人のうち半分以上の53.7%は女性であり、ウクライナの女性は昔から文学から政治まで様々な分野で活躍してきた。だが社会や活躍する分野における女性の地位と役割は時代とともに変化してきている。また女性に対する社会規範やロールモデルと思われる女性のイメージ、或いは理想的な女性像も変化している。

今まで女性問題に関する様々な分野に視点を当てて考えてきた多くの研究者がいた。まずはフェミニストで文学者のソロミヤ・パウリチコやビーラ・アゲエワ⁽²⁾、ジェンダーについては社会学者のタマラ・マルツェニュック⁽³⁾、ウクライナの社会と女性について歴史的な観点からみた社会学者のオクサーナ・キーシ⁽⁴⁾、⁽⁵⁾

(1) キエフ経済大学 (Kyiv School of Economics), 助教授, 学術博士

(2) Павличко С. Фемінізм.- Основи, Київ, 2002.

(3) Агєєва В. Жіночий простів: Феміністичний дискурс українського модернізму.- Факт, Київ, 2008.

(4) Марценюк Т. Гендер для всіх: виклик стереотипам.- Основи, Київ, 2017;
Марценюк Т. Чому не варто боятися фемінізму.- Комора, Київ, 2018.

(5) Кісь О. Жінка в традиційній українській культурі.- Інститут Народознавства, Львів, 2012.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

そして社会規範や広告における女性のイメージに関する社会学者であるテティアナ・ブレイチャックたちである。⁽⁶⁾

今回の論文ではウクライナ社会で活躍する女性の姿の昔と今とを比較してみたい。そしてウクライナの社会における女性の地位と役割，女性に対する社会規範，また女性に当てはめるロールモデルや理想などを検討した上で，最近のトレンドを見てみる。

伝統的な女性像

ウクライナの伝統文化では女性が特別な役割を果たしていた。女性は結婚して妻となり，母となって初めて大人となり社会人になれた。⁽⁷⁾ 一般家庭では妻は夫に従ったが，伝統的に母や良き妻が特別な地位を占めていた。それについてはたくさんの諺がある。例えば，「母親がいない人は太陽がないのと同じ」，また「奥さんがいないのは知恵がないのと同じ」，或いは「奥さんがいない男は，目がない人と同じ」という言い方があり，また「家は土地ではなく，女性で成り立つ」という言い方もある。⁽⁸⁾ つまり，良妻賢母的な女性のイメージが伝統的に強かったのだ。ウクライナ人は「友情」や「愛」などの感情や精神的な繋がりを大事にし，社会より家族を優先するという特徴をもっている。⁽⁹⁾ つまり，妻に恵まれたら夫も幸せで家庭円満になり，子供たちも幸せに育つ。例えば隣のロシアでは日本の家長制度に近い男性中心の家を意味する「ドモストロイ」が

(6) Бурейчак Т. Комодифіковане тіло: Дискурси тілесності в українській рекламі// Вісник Львівського університету, Серія Соціологія, вип. 1.- Львів, 2007.- с. 149-161.

(7) Кісь О. Подружні стосунки в українській селянській родині кінця ХІХ- початку ХХ століття//Українські жінки в горнилі модернізації.- Інститут Народознавства НАН України, Київ, 2017.- с.7-8.

(8) Прислів'я та приказки, НАН України, Інститут мистецтвознавства, фольклористики та етнології, -Видавець Микола Дмитренко, Київ, 2008.- с. 26, с. 68, с. 69.

(9) Стражний О. Український менталітет. Ілюзії, Міфи, Реальність.-Київ, Книга, 2008.- с.294-296.

あ⁽¹⁰⁾って、妻はどんなことでも夫に相談し、逆に従わなかった場合には夫が妻に暴力をふるっても許された。民謡に「旦那に殴られていた」というものがあり、それは「糸で縛られ、藁のストローで殴った」という笑い話の歌であり、その強く冗談好きな女性の主人公が気にもしないで全部冗談に変えて、好きなことをやり続けた変わった内容の楽しい歌である。⁽¹¹⁾

一方ウクライナでは女性が結婚する時に持って行く服、装飾品、タンスなどの財産、また受け継いだ土地などの財産がいつまでも女性個人の所有のままだという風習があり、他のヨーロッパの国々ではそのような習慣は珍しかった。⁽¹²⁾昔から自由な精神が残っているウクライナではドモストロイは通用しなかった。オリガ女帝をはじめ指導者階級の女性はその歴史には登場するが、キエフ公国時代から上流階級の娘たちが男の子と同じように読み書きもできたため、外国の王と結婚しないといけないということは少なかった。またキエフ公国の最初の法律である「ルーシの真実」には女性の職人も存在し、16世紀にガルシカ・ホロウィチブナという夫人がモヒーラアカデミー設立のためにその財産すべてを寄付し、またコサック団長のイワン・スクロパドスキーが結婚したアナスタシア夫人はそれ以前に結婚歴があり、夫よりも影響力が強かったようである。⁽¹³⁾

つまり、ウクライナでは女性の方が強かった時代があった。「結婚する」という言葉の意味を見ると、ロシア語の жениться は男性が女性をとるという意味であるが、ウクライナの語 одружуватися は「友達になる」という意味になり、かなり男女平等の雰囲気があるように思える。

(10) Домострой.- Москва, Художественная литература, 1991.

(11) <https://www.youtube.com/watch?v=m-mvy7B-bQw>

(12) Кісь О. Подружні стосунки в українській селянській родині кінця ХІХ- початку ХХ століття.- с.6

(13) Вороніна М. Тисячолітній шлях до жіночого виборчого права: які владні повноваження мали жінки в Україні з Х по ХХ сторіччя?// Гендер в деталях, 24.01.2019/ Електронний ресурс : https://genderindetail.org.ua/season-topic/polityka/tisyacholitniy-shlyah-do-viborchogo-prava-yaki-vladni-povnovazhennya-mal-zhinki-v-ukraini-z-h-po-hh-storichchya-134905.html#_ftn7 / , відвідано 24.10.2020.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

昔からウクライナの女性は，表に出なくても裏で年を重ねながら様々な決定力を持ってきた。例えば，昔の結婚の習慣に従い結婚を申し込みにきた男性に対して，返答は父親ではなく母親という場合が多かった。なぜなら，「夫は頭で妻は首。首が回ったところに頭は行く」からである。もっとも，素敵な奥さんがいる人はもっとも幸せだと言われる。なぜなら男に「三人の仲良しがいる：父，母と良い妻」という言い方をウクライナではするからだ。⁽¹⁴⁾また結婚式のパーティの席で，これから一緒に人生の道を歩くという新ボールとして刺繍されたルシニック（ウクライナの伝統的な刺繍布）の上に立ち，そして誰が一番早く立つかによって家族内で権力を持つ者が決まるというものがあるが，基本的にウクライナの社会では，いくら奥さんが強くても社会規範上それが許されない⁽¹⁵⁾ので表には出ないようにしている。

女性の年齢によって女性のイメージというものは多様化する。例えば，可愛いお嬢さん，綺麗なお姉さん，素敵な奥さん，暖かくて世話好きなお母さん，優しいおばあちゃんのように。そして「普通的女性」であり家の守り神ベレヒーニャでもあるお母さん，おばあちゃん。お母さん以外の「普通ではない女性」⁽¹⁶⁾つまり社会規範に合わず社会的に受け入れられない女性像もある。それは，詩人のタラス・シェフチェンコが「マリア」などにもよく描いたシングルマーザー⁽¹⁷⁾（ポクリトカ）。⁽¹⁸⁾それには未亡人と魔法使いの女のイメージがあった。特にお母さんや奥さんが家を守る女神ベレヒーニャというウクライナ独自の女性像があって，様々な時代に文学，メディア，政治などにそれがよく利用された。

(14) Прислів'я та приказки, НАН України.- с.1

(15) Кісь О. Подружні стосунки в українській селянській родині кінця ХІХ- початку ХХ століття.- с.23-24.

(16) Кісь О. Жінка в традиційній українській культурі.- с.208-237

(17) 参考：タラス・シェフチェンコ「マリア」藤井悦子翻訳，群像社，2009年。

(18) 参考：Worobec Christine D. Witchcraft Beliefs and Practices in Prerevolutionary Russian and Ukrainian Villages// The Russian Review. 1995. No. 2. P. 172.; Ukrainian Witchcraft Trials: Volhynia, Podolia, and Ruthenia, 17th–18th Centuries (Central European University Press, 2020) 240p.

また19世紀後半から20世紀前半に活躍したウクライナ文学のフェミニストとして有名な作家、ナタリヤ・コプリンスカ、オリガ・コビリャンスカがいた。その他女性詩人のレーシャ・ウクラインカも有名である。最後のレーシャ・ウクラインカはウクライナ紙幣200グリブナ札にもなっている。男性でお札の顔になっているのはキエフ公国のヴラジーミル公の2グリブナ、コサック団長のバグダン・フメリニツキーの5グリブナくらいであり、女性詩人レーシャの200グリブナはそれ以上に認められ尊敬されているのだ。

1917年頃、六ヶ月間しか持たなかった独立ウクライナ共和国政府に、6人-15人の女性議員がいて、その中で唯一大臣レベルの学校教育担当、ソフィア・ルーソーワという人がいた。⁽¹⁹⁾彼女は革命以前からすべての教育をウクライナ語で進めることを強調した人であり、またウクライナ共和国がピリオドを打たれたのち西ウクライナに移動して、1919年に「ウクライナ夫人連盟」を設立した。つまりウクライナでは、女性が社会的に公の場に出られるのは他国に比べると割合早かった。

ソ連時代のウクライナ：女と女性像

1917年-1918年にかけて、ウクライナ共和国と同時期にハルキフでウクライナ共産党の政府（Народний комісаріат）ができた時、唯一女性で内務大臣になったのはエフゲニヤ・ボーシュだった。そしてソ連政権になってから女性機関（女性部）を通して様々な女性のための政策を導入させようとしていた。1925年から政府内におけるジェンダーの割合を提唱し始め、1937年の憲法でその割合が決まった。そしてその次の年の議員選挙で、女性議員の占める割合は⁽²⁰⁾1/4程度になった。

(19) 参考：Оніщенко, О. В. Жінки в Українській Центральній Раді / Оксана Оніщенко // Література та культура Полісся. - Серія: Історичні науки, - № 85, 2016. - С 81-90; Русова Софія. Мемуари. Щоденник. — К.: Поліграфкнига, 2004. — 544 с.

(20) Ірина Тишко. Жінки в політиці України: 100 років еволюції // електронний ресурс: <https://genderindetail.org.ua/season-topic/polityka/zhinki-v-polititsi-ukraini->

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

またソ連のプロパガンダとして，家事から解放され仕事や様々な社会活動に参加する女性のイメージがアピールされた。映画会社モスフィルム⁽²¹⁾のロゴで有名な彫刻家ベーラ・ムーヒナが作った銅像は，労働する男性と農業をする女性をペアにしている。つまり，労働は男性が，一方農業を担当するのは女性というジェンダー的な仕事区分が提唱された。そして「労働者」と「農業従事者」，またその他のいろんな女性の「仕事」と思われるものにそれに見合った女性像が作られた。例えば家事から解放された母親，女性の先生や研究者，そして女性のスポーツ選手，または女性議員などなど。その彼女たちのイメージがポスター，映画，新聞などのメディアでよく利用された。例えば「母親ヒロイン」，「政治家」，「スポーツ選手」，「宇宙飛行士」の女性像などは興味深い。女性は投票をする自由と同時に，仕事でキャリアを積み重ねる自由も手に入れたが，「良き妻や母親」としても認められるためには家事も同時にしなければならなかった⁽²²⁾ので，実際には女性の仕事の量が増えただけだった。またカラフルで素敵なイメージと厳しい現実との間にかなりギャップがある時もあった。第一次大戦や革命後のウクライナでは男性労働人口が減ったため，多くの場合肉体労働にも女性が雇われる場合が少なくなかった。当時産業が開花していたハルキフ，ドニプロペトロフスクやドンバス，港のミコラエフあたりの工場やコンビナートに多くの女性労働者が働いていた。例えばその頃のドンバスの炭鉱産業における労働者の内23.4%は女性だった。

ところが実際は生活が大変で，多くの女性が生活を成り立たせるのに精一杯だった。特にウクライナでは1933年の大飢饉があって，生き延びるため，また

100-rokiv-evolyutsii-134913.html#_ftn24 / , відвідано 10.10.2020.

(21) 参考：Кобченко К. Емансипація по-радянськи : жінки в фізичній культурі та спорті в СССР у 1920-1930 рр. // Українознавчий альманах. 2010, Вип. 4. – С. 106–115.

(22) Вороніна М. Нова радянська жінка : гендерна політика радянської України у 1930-х роках // Українські жінки в горнилі модернізації/за ред. О.Кісь, Інститут Народознавства НАН України, 2017, с.133-134.

自分の子供達を救うために様々な画策をし、その中には共産党本部まで手紙をだす人もいた。伝統的に家族の食事担当は女性である妻や娘であって、地主農家から年貢の食料を全部取られた時に生き残るために、また子供達や年寄り達を食べさせるために、政府の搾取に対して提供しない特別な勇気を出し、実は当時の飢饉の記録の3/4は女性が残したものである。⁽²³⁾

また第二次世界大戦中もドイツ軍に占領された地域に暮らし、またその占領に反対する活動によく参加する女性もいた。その中には共産党関係のパーティザンと独立軍の両方で活躍していた女性もたくさんいて、そこで不平等や暴力にあうことも少なくなかった。また戦争が終了した後、独立軍を支援していた女性がそれまでに大変な苦勞をしたにもかかわらず、ソ連政府に多数取締まれてシベリアに送られたことも多かった。⁽²⁴⁾

そして第二次世界大戦後のウクライナ人口の比率（戦前労働人口は700万人、戦後350万人でその内女性の割合は64%までに変化し、実に二人の女性対一人の男の割合になった。戦争で多くの男性が亡くなって、女性の人口比率が上がり結婚が難しくなっていた。特に田舎での結婚事情は悪かった。また、労働力が不足しているので女性を男性の肉体労働の代わりに雇われたことも少なくなかった。戦後でも「男性並に産業や農業復帰に携わることができる」という女性への呼びかけがあった。だが国家の「注文・呼びかけ」があり女性がそれに従ったとしても、職業選びなどの選択はできなかった。

その制限された範囲内で様々な女性ヒロインが現れた。その中の一人はドネ

(23) Кісь О. Голодомор крізь призму жіночого досвіду виживання //Українські жінки в горнилі модернізації/ за ред. О.Кісь, Інститут Народознавства НАН України, 2017. - с.162-163.

(24) 詳しく：Марта Гавришко. Жінки в національному підпіллі: внески і втрати// Українські жінки в горнилі модернізації/ за ред. О. Кісь, Інститут Народознавства НАН України, 2017.- с.204-230; Оксана Кісь. Українки – політв'язні в таборах ГУЛАГу: вижити означає перемогти// Українські жінки в горнилі модернізації/ за ред. О.Кісь, Інститут Народознавства НАН України, 2017.- с.262-302.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

ツク州のトラクター運転手，パーシャ・アンゲリナである。彼女は社会勤労ヒロインとして政府から1947年と1958年に労働勲章を与えられ，「農業を頑張る女性」というフレームで作られた女性のシンボルだった。ちなみに戦後のウクライナの女性雑誌に「労働婦人」，「農業婦人」そして「ソ連婦人」というものがあった。「10万人の女友達をトラクターの運転手に！」というスロガンの下で，政府はパーシャさんが微笑んでいる顔のイメージを作り国の労働力不足を解消しようとしたのだ。彼女は共産党の14回から20回までの集会で常に変わらない議員のメンバーだったが，政治家として「お飾り」的な役割しか果たせなかった⁽²⁵⁾。また「シンボル」にされたパーシャさんも個人的に色々大変であり幸せではなかったようだ⁽²⁶⁾。

ソ連が人口を増やす政策の下，子供をたくさん持つお母さんは自己実現をした女性だと思われていた。三人以上子供を産んだ母親は「ヒロインの母親」という勲章ををもらい，その子供達もいろんな手当をもらっていた。そして国会議員にも選ばれることも少なくなかった。ちなみに，社会勤労ヒロインは戦争が終わる間際の1944年の時に作り上げ，その後ソ連が崩壊されるまで50年近く存在し続けた。その間女性は働かなくてもいいという意識が社会から消え，今では働かない女性はすごく稀になった。

社会主義下では働かない人はいい人と思われな。また子供を産まない女性もいい女性と思われなかった。結局女性はその二つの条件をクリアしなければ

(25) Марина Вороніна. Тисячолітній шлях до жіночого виборчого права: які владні повноваження мали жінки в Україні з X по XX сторіччя? . – [Електронний ресурс]. –: Гендер в деталях, 24.09. 2019.
https://genderindetail.org.ua/season-topic/polityka/tisyacholitniy-shlyah-do-viborchogo-prava-yaki-vladni-povnovazhennya-mali-zhinki-v-ukraini-z-h-po-hh-storichchya-134905.html#_ftn7

(26) 詳しく参考には：Вороніна М. Жіноче питання в Донбасі та феномен Паші Ангеліної (20–30-ті рр. XX ст.). // Збірник наукових праць. Серія «Історія та географія»/ Харківський національний університет імені Г. С. Сковороди. Вип. 33. – Харків, 2008. С. 147– 153.

ならなかった。1961年にソ連政府は仕事を四ヶ月間以上しない人に対して厳しい罰則を決定し、働かなくても良い例外としては子供を持つ専業主婦だけで、その頃「主婦」という新しい女性の職業も認められたが数は少なかった⁽²⁷⁾。

働いている母親はソ連社会と無言の社会契約で結ばれ、社会人として、女性として認められる。道德の高い人であって上手にその両立ができ、働きながら家族を持っている。その二つでもって立派な母親であると認められる。つまり、いくら「働いている女」のイメージを作っても、女性の元々の役割は元気な子供を作ることである。そして母親としての良さは子供の実績で決める。よく育っているか、礼儀が正しいか、また成績がいいかなど。

また1966年十月に共産党の宣言があって、「個人より団体目的の方が大事」というもので、働かない女性は社会への貢献が足りないとして、女性は1人-2人の子供を産んだ後できるだけ早く仕事に戻ることが普通になった。その結果女性は、安い賃金で家庭と仕事の両立をせざるを得ず、いつも忙しく家事にも追われる悪循環になった。だが自分が持つ「母親」としてのイメージを壊さないためにも、その不満を表に出すわけにはいかなかった。

1950年代頃には保育園が不足していた。1970年代まで出産休暇は1ヶ月間だったので、子供は産んで間もなく保育園にあずけられていた。そのため1950年-1970年始めまでに生まれた人には親との関係が安全で安定した例が少なく、置いていかれたというトラウマを経験して入る人が多い。そして最近そのテーマの心理学講座が流行っている⁽²⁸⁾。しかしソ連政府は1970年代以降保育園を増やし、育児休暇も増やすことに努力した。

このような家庭事情の中で、歌や映画などのポップカルチャーで描かれてい

(27) Музичка М. Образ ідеальної домогосподарки в СРСР // Історична правда. – [Електронний ресурс]. –: <http://www.istpravda.com.ua/research/4d3340f6bad25/> / відвідано 10.10.2020.

(28) ロシアのタタールスタン出身でスペインバルセロナ在住の心理学者のユリア・ルブレワは70年代-80年代に生まれた人の世代について講座を持っている。参考に <https://yuliya-rubleva.timepad.ru/event/926716/>

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

る理想な夫のイメージは，お酒を飲まないでレジャーやスポーツをする男だった。またウクライナ文学などで1950年からソ連が崩壊する1990年まで流行っていた女性イメージは，仕事を頑張って家庭も持つ「ソ連女性」と「優しくて情緒的なヒロインのような女」であった。⁽²⁹⁾理想的なソ連女性は，仕事を完璧にしながら立派な主婦であって家事や育児を上手にこなしている，また女性としても美しい。これらはかなり達成しにくいものであったと言える。

そしてモスクワオリンピックに向けた1980年代，「スポーツで勝つソ連」のイメージを強化しようとしていた時に，スポーツ界のモデルカップルもいくつか現れた。そのなかで特に目立っているのはサッカー選手のオレグ・プロヒンと新体操のイリーナ・デリューギナの夫婦である。普通の男性はサッカーが好きで，女性は新体操が好きで，その結果結ばれた二人はより多くのオーディエンスの目を引くことができた。若くてスポーツで二人とも成功していて，しかもソ連家族の代表モデルになれるとても憧れ的な存在だった。残念ながらウクライナ独立後に離婚したが，オレグ・プロヒンもしばらくウクライナサッカーの代表コーチをし，イリーナ・デリューギナも「デリューギナ新体操派」の代表で，今でも新体操ウクライナ代表チームを指導している。

ソ連時代には女性政治家は飾り物であったが，実は一人大いに活躍した女性がいた。1980年代半ばまでウクライナ人女性政治家は少なかった。だが1980年代後半になって，「ソ連時代のウクライナ人女性政治家」のイメージを代表するウクライナ共和国最高会議唯一の女性議長，ワレンティナ・シェフチェンコが現れたのは興味深い事例である。1985年に50歳で，高齢化が進むソ連共産党本部で最も若くしてウクライナ共和国の最高会議議長に選ばれた。そして特に彼女の功績として，チェルノブイリ事故後のキエフの子供達の避難において欠かせない賢母的な役割を果たした。ウクライナの男性政治家が責任を取りたく

(29) Стяжкіна О. «Радянська жінка» і «лірична героїня»: Створення стереотипів в українській літературі 50–90-х років // Наукові праці. Збірник. Т.10: Історичні науки. – Миколаїв, 2001.– с. 146.

なかった時、政治家であり母親でもあるワレンティーナはモスクワからの命令を待たずに、キエフの子供達の避難を決めて集団移動列車を用意した。「飾り物」であると言われた女性政治家は、チェルノビリの時に十分活躍したのだ。

ソ連崩壊後から「自尊革命」までの女性と女性像

1991年の独立後に資本主義の道を選び、物質的な価値観に移行したウクライナで、価値観の移り変わりとともに女性に対する社会規範にも変化が顕れ、理想と思われる女性像にも変化があった。以前「価値」と思われた「文化、知識、勉強、道徳」から「もの・お金・急激な成功」への価値観の変動である。

また生き延びる力を持っている受難の女性がいち早く新しい資本主義社会にとけ込み、新しい価値観にも馴染んだ。その枠組みに、働き続ける女性と専業主婦も多くが入っていった。昔から家を大事にし、賢母的な母親のイメージが強かった社会規範が「家庭を守る女性＝守り神＝ベレヒーニャ（Берегиня）のイメージ」で生まれ変わった。ウクライナの民族作家にその言葉とイメージがより使われるようになった。そして現在ウクライナは独立してから30年近く経っているが、そのイメージがまたよく使用されている。ある意味、ソ連時代の過去から現在を切り離したいという理由で、女性のイメージを伝統と未来の交差点に置いて新しい社会構築をしようとしたものだ。ベレヒーニャは強い女でありながら伝統的な特徴もあったのでそのまま適用されたが、それ以外にもアメリカの消費文化に影響されたバービー人形のような女性、或いはバリバリ働くキャリアウーマンであるフェミニストの女性のイメージが現れた。⁽³⁰⁾

このような変化に従って新しい女性メディアも現れた。独立後ウクライナでは独自の女性雑誌がいくつか創刊された。まず独立後の90年代に「エワ」や「ナタリー」がしばらく続いた後、ピリオドを打った。また新しく登場した「唯一の女」（ロシア語発行の Единственная）と「女性雑誌」（同じロシア語発

(30) 参考に：Кісь О. Моделі конструювання гендерної ідентичності жінки в сучасній Україні / О. Кісь // Ї. – 2003. – No 27.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

行の「Женский журнал」という女性専用のメディアが登場した。外国から入ってきた「コスモポリタン」や「マリークレア」と同時に，この二つの雑誌の中で特に「輸入的な存在」でバービー人形のような女性と民俗学から引用した保守的な「守り神」的女性像，そしてビジネスウーマン像に新たな女性政治家像も形成された。

だが2000年以降になると新たな女性登場とともに新たなイメージもできる。まずは「女性政治家」も少しずつだが，飾り物だけに終わらない人も出たのでイメージも刷新されるようになった。女性で現役の政治家であるユリア・ティモシェンコが登場し，それまでにあった「性がない」女性政治家のイメージを破壊した。彼女はセクシーであり活力があり，また女性力が溢れている存在で，男性社会で活躍するために女性的と思われる全ての資質を利用し続けている。「鉄の女」，「アマゾンカ」，「革命のプリンセス」，「スカートをはいた侍女性」などと呼ばれ，政治家であり「女性」である彼女の現象がウクライナのジェンダー研究者から一躍注目を浴びている⁽³¹⁾。

またもう一つは，2000年以降の社会現象でメディアなどに描かれたイメージである，外国に出稼ぎに出る母親像である。多くの場合，西ウクライナ出身の女性で40歳以上，夫と中学生くらいの子供を家において，イタリア，スペイン，ポルトガル，ギリシャなどへ高齢者のためのヘルパーとして，またベビーシッターとして出かけて家族に仕送りする。戦後のイタリアとギリシャだと男性像であったが，独立後のウクライナでは女性の一つのモデルである。その現象について歌手のジージョが歌った，ポルトガルにいる10年も会っていない母親に会いに行くという歌があって，また2016年の映画で「カメの巣」の映画では，イタリアに出稼ぎに行き帰る女性の話も大きな注目を浴びた。

(31) Маслова Ю. П. Моделі гендерної ідентичності жінки в сучасній Україні (на матеріалах друкованих ЗМІ) / Ю. П. Маслова // Збірник наукових праць Кам'янець-Подільського національного університету ім. Івана Огієнка. – Кам'янець-Подільський: Аксіома. – Вип. 20. – С. 425–436.

一方外国にモデルの仕事で出かけて成功した事例もいくつかあって、その中で特別なのはパリ在住のジェイムス・ボンドガールにもなったオリガ・クリレンコだ。ウクライナ人女性の美しさを世界的なレベルにまで高めた。

2011年のウクライナ統計局の発表によると、5人に一人の子供は未婚の母親から生まれる。1991年にはわずか11.9%だったが、2011年には21.9%となった。その傾向は2004年から更に顕著になったようだ。一方10%–12%のカップルは結婚を役所に届けられない事実婚にしている。ある意味で女性は経済的に強くなる一方で、シングルマザーのイメージ変化が現れる。かつてはイメージが良くない未婚で子供を産む女性は、現在では遊んでいる女ではなく自立している女に変わって来た。また2010年以降に女性雑誌を見ると多くの記事で「女性であることはどういうことか」と問われる一方、心理的にも女性は強くなってきた。女性作家、詩人、文化人もたくさん現れ、また女性雑誌のテーマとして増えてきた「女性磨き」、学習、習い事、結婚、出産、離婚、外国出稼ぎへなどの多くの社会現象が表明されるようになった。

また2000年までは「文化的な方針」「社会意識」は「活字」という媒体で成り立っていたが、2000年以降に「新たなメディア誕生・ネット・ブログ、SNS」など大きな変化をもたらした。ブログなどで有名になる社会活動家の女性も登場するようになった。

21世紀もリードし続ける文化人女性：詩人、作家、歌手、政治家

だがまずは活字の文化を担う、ウクライナ独立後に活躍する多くの女性作家を紹介したい。60年代から活躍している女性詩人のリーナ・コステンコは、2000年以降に大活躍している。オレンジ革命をテーマにした「一人歩きの日記・いかれた人の日記」という初めての長編小説を出し大好評になった。⁽³²⁾

また1960年生まれのオクサーナ・ザブージュコは哲学部卒の、文学評論家で

(32) Ліна Костенко, Записки українського самашедшого, А-ба-ба-га-ла-ма-га, Київ, 2011.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

最も有名な女性作家であり、彼女の作品は興味深いものばかりである。ウクライナ文学評論家のソロミヤ・パウリチコの次に、独立してから最初のウクライナのフェミニストでありながら深い歴史小説も書く人で様々な賞の獲得者でもあり、多くの外国語にも訳されている。⁽³³⁾ 政治的なエッセイ以外に最も有名な作品は「ウクライナ人のセックスのフィールドワーク」である。⁽³⁴⁾ その中でウクライナ社会における女性の役割、また性や恋に対する考えを考察している。そして2010年に様々な賞を受賞した、832頁もある「置いていかれた秘密の博物館」⁽³⁵⁾ を出版した。彼女にとって初めてのウクライナ文学の長編小説であり、家族の祖先を探ってストーリーを語る。また2014年から「コモラ（倉庫）」という出版社も設立させ、そこで多くの翻訳の作品、エッセイ、小説も出している。

また他に40代–50代の女性作家で活躍している人が何人かいる。その中の一人は代表的な存在で、映画化もされた20冊以上の人気サスペンスの著者である、1962年生まれのイレン・ロズドブディコである。彼女は脚本家でもある。彼女の作品では街に住むよくある一般ウクライナ人女性を主人公とすることが多い。⁽³⁶⁾ そして1973年生まれの作家で弁護士でもあるラリーサ・デニセンコの、2006年に出版された「マスクでの踊り」は韓国でのウクライナ人の物語であって、その年に国内の雑誌賞を受賞した。また彼女の、「マヤと彼女のお母さん達」という題名で多様化している現代家族について書かれている子供向けの物語も⁽³⁷⁾ 2017年に大きな評判になった。

それから1957年生まれの作家のリュコー・ダシュワル（イリーナ・チェルノワ）の本は10万冊を超える増刷をしている。彼女の作品では田舎・町という対立がよく描かれ、ウクライナの村や小さな町の日常生活と人間関係が描かれて

(33) Соломія Павличко, Фемінізм.- Основи, Київ, 2022.

(34) О. Забужко. Польові дослідження з українського сексу, Київ, 1996.

(35) О. Забужко «Музей покинутих секретів» Факт, Київ, 2009.

(36) І. Роздобудько «Гудзик», Фоліо, Харків: 2005.

(37) Л. Денисенко «Танці в масках», “Нора-Друк”, Київ, 2006; Л. Денисенко «Мая та її мами», “Видавництво”, Київ, 2017.

⁽³⁸⁾ リュコー・ダシュワルはペンネームで、彼女の小説は読みやすくてとても人気があり、国内文学賞もよく受賞する。

また1980年生まれの作家、歌手でシンガーソングライターでもあるイレーナ・カルパが面白い。彼女は今まで10冊以上作品を出版し、「カルパ⁽³⁹⁾」というパンクロックを歌うバンドも持って若者に非常に人気のあるユニークな女性である⁽⁴¹⁾。

それ以後女性のバンドも現れるようになった。その中で劇場出身のキャバレーバンドの Dakh Daughters は注目を浴びている。女性ばかりのバンドであり劇場でお金を稼げないので、もう少し何かできないかと考えて、フランスやドイツの劇場のカバー曲を取り入れ特殊なメイクや衣装をした上で、新たなジャンルを作り社会的に重要な話題を歌にする⁽⁴²⁾。彼女たちについてNHKワールドで特別番組を作ったこともある⁽⁴³⁾。

その他残念ながら、最近活動にピリオドをうって解散したパニ・ワルコーワは特に面白いものだった。3人の20代後半-30代初めまでの女性が多く、楽器を使ってウクライナの伝統的な歌い方で、ロックとフランスのシャンソンをミックスした作品を作っていた⁽⁴⁴⁾。

(38) Люко Дашвар “Село не люди” (КСД, Харків, 2007), “Рай. Центр” (КСД, Харків, 2009) «Молоко з кров'ю» Клуб сімейного дозвілля, Харків, 2008.

(39) І. Карпа «3 Роси, з Води і з Калабани», Клуб Сімейного Дозвілля, Харків, 2012.

(40) https://www.youtube.com/watch?v=gj_xunglftA&list=PLrIH8d4HT48Em8NCv3tH439NiairZRU5l

(41) 女性とウクライナ文学の関係を参考に：オリガ・ホメンコ【シンポジウム報告】「独立後の現代ウクライナ文学：プロセス、ジャンル、人物」『スラヴ文化研究』第16号、2019年、104-127頁

(42) <https://www.youtube.com/watch?v=6wCgZh-nczY>

(43) <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/video/2058574/>

(44) <https://m.youtube.com/watch?v=hcif5lm7mj0>

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

自尊革命とウクライナ人女性：一般人・作家・歌手，社会活動家

2013年の秋，キエフでヤヌコービチ政府への反対デモが始まり独立広場に多数の人が集まった時，様々な年齢の社会人，学生，会社員，研究者など多くの女性がそこに通い始めた。彼女たちは反対活動に積極的に参加したのだった。例えば，広場のキッチンで働き出し，様々な年齢の女性が手作りサンドウィッチや食事を他から持ってきた。1933年の大飢饉を経験しているウクライナの女性は，まずは人を食べさせるという習慣があり，母親的，娘的な役割や機能が働⁽⁴⁵⁾く。また対立が激しくなるにつれて広場での医療機関（マイダン病院）で働く女性が現れ，また広場で教育講座（マイダン大学）を開く女性，そして広場の野外食堂を開いてそこで食事の仕事する女性も現れた。2月の衝突になると命をかけた女性もいて，実際亡くなった一人に中年女性もいた。そしてどこから見てもこの自尊革命において女性は受身的な，単にサンドウィッチを作って「女性の守り神のベレヒーニャ」で「手伝っている」という役割だけではなく，ここでは政治的反対活動に積極的に参加し，政権を倒すために重要な役割を果たした⁽⁴⁶⁾。

そしてその頃のウクライナとロシアの関係をジェンダー的に表現することが多かった。半分冗談に例えると，離婚した夫婦があり，それはウクライナとロシアである。70年間もの長い間，もう愛情を持たない夫としてのロシアに連れ添うのに疲れて，もう少し尊敬し合い平等な関係で，いい生活レベルを提供してくれる素敵なヨーロッパの男性のところに行きたいが，古い夫はスカートの

(45) 参考：Tamara Martsenyuk, Olha Onuch, Mothers And Daughters Of The Maidan: Gender, Repertoires Of Violence, And The Division Of Labour In Ukrainian Protests, Social, Health, and Communication Studies Journal Contemporary Ukraine: A case of Euromaidan, Vol. 1(1), November 2014, pp. 80-101.

(46) 参考：Emily Channel-Justice, “We are not just the sandwiches”: Europe, Nation, and Feminist (Im)Possibilities on Ukraine’s Maidan, Signs: Journal of Women in Culture and Society, 2017, vol. 42, no. 3. pp. 717-741.

裾を踏んでなかなか行かせてくれない。おまけに子供たちのクリミアとドンバスを取って虐める。だが普段は弱い女性が今回に限って、自分で決めたことを一歩も下げないで戦う。半分冗談だが、かなり真実に近い例え話でもある。

この時期、それまで作家や音楽活動をしていた Dakh Daughters やイレーナ・カルパなどの文化人はマイダンに料理を運んで、歌を歌って、また自分の服を売ってお金を寄付していた。またマイダンでの革命が終わってから新たな社会活動家や政治家の女性もたくさん出てきた。それ以降新たなトレンドが生まれた。その中でジェンダーについて、また個人実業家になるための様々な講義の開催、それから社会を改善するための様々なボランティア活動を行なっている女性リーダーで、NGO、NPO 機関を設立させた女性もいた。1984年生まれのアナスタシア・メルニチェンコは、社会や学校で「いじめ」をなくすために「スツデーナ」という NPO を起こした⁽⁴⁷⁾。その枠組みでは戦争から戻ってきたベテラン達が社会復帰のために、精神的な癒しに繋がるイベントや活動、また学校でいじめをなくすために先生たちへの教育など行う。創立者のアナスタシアのような女性は社会活動、子供を持つ母親、家庭内の旦那と奥さんについて家事の分担、またセックスについて社会的な場で語ることを怖れない人である。

またドンバスが取られた結果、多くの人は家を失ってウクライナの違う地域に移動せざるを得なくなり、そのような人を助けるボランティア活動しているフロロフスカヤ 9/11（住所の名前をそのまま使う）、NGO を起こしたレーシャ・リトビノワなど、ボランティア活動する女性が増加した。

それまで映画監督の卵で、作家としても有名な1984年生まれのイリーナ・ツィリックは、ボランティアで軍隊に行く女性が増え、また軍隊のために様々な発明をする女性が増える傾向を見て、他の女性二人アリナ・ホルルワとスピトラーナ・リシチンスと一緒に、2017年に「見えない部隊」というドキュメンタリー映画を作った。その中の主人公の一人で、1988年生まれで元修士課程の⁽⁴⁸⁾

(47) <https://studena.org>

(48) <https://www.facebook.com/InvisibleBattalion/>

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

大学院生マリア・ベルリンスカさんは，戦争にボランティアで従軍した後軍隊のための飛ぶドローンの開発活動に関わった話も面白い。また2014年マイダンの女性が頑張ったことについての「マイダンでの女性たち」と言うドキュメンタリーをコ・プロデュースで作った国際的に有名なオリガ・オニシュコも話題⁽⁴⁹⁾になった。同時に2014年に制作された「革命の女性の顔」というドキュメンタリーも注目を浴びた。⁽⁵⁰⁾

2019年にイリーナ・ツィリックは「オレンジに似た青い色の地球」という，戦争で国境線近くに住んでいる数人の子供と一人の母親の物語からなるドキュメンタリーを発表し，アメリカのサンダンス映画祭なども含め多くの国際映画祭で優勝した。またウクライナのマイダンでの自尊革命後の社会における，女性⁽⁵¹⁾にとっての「選択」についての国際的な研究も発表されている。⁽⁵²⁾

また自尊革命後の社会現象として，子供を持つ女性の気持ちを重視し，子育て中の気分転換の必要性が主張され始めた。例えば女性用 Co-working スペースのそばに，子供をもつ母親用のスペースをつくるなど。そこでは安い料金で子供をベビーシッターに預け，その間に母親は同じ場所でマニキュアなどができるサービスを提供し始めた。⁽⁵³⁾それと同時に，2014年以降に仕事や結婚相手が見つからず，経済的な理由で外国に出稼ぎやお嫁に行くことになったことも事実である。

だが，自尊革命はウクライナ人女性にとって自分の社会役割，居場所などを

(49) 以前に2010年のカン映画祭のマーケットに出されたウクライナ史を個人ストーリーで語るドキュメンタリーの「Three stories of Galicia」の監督

(50) <https://www.youtube.com/watch?v=bzgEE8i360g>

(51) <https://www.youtube.com/watch?v=fckhgAvxTE0>

(52) 参考に：‘From the Maidan to the Donbas: The Limitations on Choice for Women in Ukraine’ in Lynne Attwood, Elisabeth Schimpfössl, Marina Yusupova (Eds.) *Gender and Choice after Socialism* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2018), pp. 47-78; Sarah D. Phillips, *The women squad in Ukraine’s protests: Feminism, Nationalism and Militarism on the Maidan*, *American Ethnologist*, Vol. 41, No. 3, pp. 414-426.

(53) <http://www.zelenka.kiev.ua>

改めて確認し、また自立する場でもあって、ウクライナのフェミニズムにとって重要なイベントだったのだ。

2014年以降、女性のことを語る本や絵本などもたくさん出た。その中で2018年に50人の作家と絵描きさんが、6歳－9歳の子供向けに「これは彼女が作った」という名のウクライナ人女性が頑張る物語を作った。⁽⁵⁴⁾ またもう少し年上の9歳－12歳向けの子供にも同じような50編の物語で「これも彼女が作った」という続巻を出版した。⁽⁵⁵⁾

それ以降もフェミニズムについてのいくつかの本が出版され、社会論評を呼んだ。その中でタマラ・マルツェニュークの2017年に出版された「皆のためのジェンダー。ステレオタイプを変革しよう」と、2018年の綺麗なイラスト付きの「なぜフェミニズムを怖がらなくてもいい」が注目集めている。⁽⁵⁶⁾ また2020年にイレーナ・カルパは、歴史を女性が作ったという内容の「一番格好いい男性は女性である」という歌を発表し、その歌詞に国際的にも有名な数人の有名な女性名を入れて、カバーにもサーチャやフリーダ・カロー、また19世紀の詩人レーシャ・ウクラインカを入れて評判を獲得した。⁽⁵⁷⁾ また社会活動家のアナスタシア・メルニチェンコはウクライナの「me too」の話を始め、学校のジェンダー教育改善への取り組みにも積極的に活動している。

一方自尊革命後に女性議員が増え、その中で特に国会外務員会所属で30代の元ジャーナリスト、ハンナ・ホプコ、また同じ員会のメンバーで同じ30代後半の元ジャーナリスト、スヴェトラナ・ザリシュックが注目を浴びた。彼女たちは以前の政治家と違って「お飾りもの」でも背広の世界で女性力を使って活用したでもなく、よく勉強してきた自分の知識と専門力を生かす新たな女性の政治家のパターンになった。二人とも美人だが、それは別の話として。

(54) Це зробила вона, «Видавництво», Київ, 2018.

(55) Це теж зробила вона, «Видавництво», Київ, 2018.

(56) Тамара Марценюк, Гендер для всіх: виклик стереотипам. - Основи, Київ, 2017;
Тамара Марценюк, Чому не варто боятися фемінізму.- Комора, Київ, 2018.

(57) <https://www.youtube.com/watch?v=rCXMAqLj3ys>

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

そして2019年にゼレンスキー大統領になって以降，女性議員の人数も減らず，もっと若い人が議員になる傾向がある。そして外務省を含む多くのウクライナの役所では「HeForShe」の運動に参加している。自尊革命後に初めて女性（最初はラーナ・ゼルカリ，その次はエミネ・ジャパロワ）が外務副大臣になり，初めてのG7国の在英ウクライナ大使はナタリア・ガリバレンコという女性になり，また大使として女性が増える傾向にある。

また2013年の秋から「国産で1年間生きる」というプロジェクトを起こした，元ジャーナリストのユリア・サヴォースティナは面白い事例である。パッケージやデザインが格好悪くどちらかというと外国製品を優先する若者が，初めてウクライナ産のものもいいかもしれないと気づいた。そして自尊革命後にキエフでウクライナ産のものを中心に売っている小さい店を運営したが，経営が大変だったのでそれを閉めて，今度はウクライナ産のものを売っている日曜日野外マーケットを開いた。2014年以降初めて輸入品の多さやその高い税金に気づき，しかもロシア製の多くに頼っていたと気づいたウクライナ社会も，国産のものをもっとたくさん買わなければならないと気づいた。そこからクリチャーティク通りにウクライナ産ばかりのものを売っている「皆・国産」（Всі. Свої）という店や，月に一回同じ名前のマーケットも開かれるようになった。ある意味，個人女性のイニシアティブにより消費ナショナリズムが進んでいる。⁽⁵⁸⁾最近彼女は国内旅のプロモーションに力を入れて本も出している。⁽⁵⁹⁾

そして自尊革命以前から進んでいた国内や海外在住の文化人や作家に女性の影響力が強くなっている。オーストリア在住の作家のターニャ・マリヤルチュクは，外国にいるウクライナ人のアイデンティティーについて書いた彼女のエッセイで注目を浴びている。⁽⁶⁰⁾またアメリカ在住の文学研究者で作家のオク

(58) この話題について今別の研究調査を行なっている。

(59) Юлія Савостіна, #madeinukraine. Shop, eat, travel-Саміт-книга, Київ, 2019.

(60) Таня Малярчук «Така нестерпна рідна чужина», авторська колонка для DW, 20.03.2018/Електронний ресурс:

<https://www.dw.com/uk/таня-малярчук-така-нестерпна-рідна-чужина/a-42791045/>

サーナ・ルツィーシナは、ウクライナ社会における女性、家族、愛と暴力を話題にした作品を出した。⁽⁶¹⁾ またパリ在住の作家でシンガーソングライターのレーナ・カルパは、パリで頑張っている4人のウクライナ人女性の「アラル海からの日記」と、エッセイ集の「どうして何回も結婚してもいいのか」という作品を出版し大いに売れていて、それまでウクライナに伝統として残っていた「女性のあり方」、「結婚のあり方」、また「家族のあり方」に対する社会規範を大きくシフトさせようとして注目を浴びている。⁽⁶²⁾

遅れている傾向のウクライナ人男性

このように一所懸命頑張っているウクライナ人女性を背景に、イギリス政府や国連のレポートにおいて「現代のマスクリーニティ（男性性）について：ジェンダーステレオタイプと女性に対するDVについて」の意識調査が2018年6月に公開された。⁽⁶³⁾ その中でウクライナ人男性の理想とする女性に対する質問もあった。それを見ると保守的な意見の多いウクライナ人男性に驚く。

18歳-52歳までの1,562人の男性に聞き取り調査をした結果、7割の男性は女性の最も大事な役割として、家を綺麗にして食事を作ることとしている。そして66%の男性は、女性が男性を満足させるための努力が必要と思い、67%の男性は家族で最終決定するのは男であると思っている。そして10%の男性は、女性がDVを受けても家庭を破壊させないためにはそれを我慢する必要があると思っている。また50%の男性は飲酒中の女性がDVを受けるのは自己責任で

відвідано 10.10.2020

(61) Оксана Луцишина. Іван і Феба.- Видавництво Старого Лева, Львів, 2019

(62) Ірена Карпа. Добрі новини з Аральського моря - Книголав, Київ, 2019; Ірена Карпа. Як виходити заміж стільки разів скільки захочете - Книголав, Київ, 2020.

(63) Сучасне розуміння маскуліності: ставлення чоловіків до гендерних стереотипів і насильства щодо жінок, Київ, 2018/електронний ресурс:
http://www.un.org.ua/images/documents/4495/Сучасне%20розуміння%20маскуліності_Звіт%20дослідження.pdf /відвідано 7.10.2020.

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

あって、また18%の男性は女性が浮気した場合殴っても良いと思っているようだ。

またこの調査結果で家事の役割分担が平等ではないことがわかった。ウクライナの大きな街では家事を、女性は週に27時間、男性はその半分以下の12時間、小さな町で女性は29時間、男性は15時間、村ではそれぞれ29時間と15時間をかけていることがわかった。そして週に子供と過ごす時間にも大きな差があって、女性は週に49時間、一方男性は22時間しか過ごさない。そして家族の物事の最終決定では、自分の奥さんより自分の意見の方が大事と思うのは32%の男性である。この調査結果が発表された時大きな社会議論を巻き起こした。多くの人にはウクライナ人女性は様々なところで進歩的であって、ウクライナ人男性は遅れていると指摘されている。

結びとして

長いウクライナの歴史を見ると、オリガ女帝みたいな強い女性がいたが、彼女の夫が殺されて以降指導者として認められるためには、男並みに戦わなければならなかった。そして強い性格を持っているウクライナ人女性は、特にソ連になって産業から政治まで幅広い範囲で活躍していたかに見えたが、プロパガンダやメディアでは「母親」、「妻」、「娘」というイメージ「型」にはめられ、実際の女性は社会から大変なプレッシャーをかけられ、自立できるだけの経済的、社会的な力があまりなくて矛盾した状況にあった。

そしてウクライナ独立後、外部から来たバービー人形のようなイメージが形成されても、昔ながらの伝統的なロールモデルとしての「家庭を守る」母親的（良妻賢母的な）存在が強く、政治家、メディアなどもどうしてもその型に女性を収め続けていた。

数年前にキエフの英語新聞「キエフ・ポスト」に、「ウクライナ人女性とどうキスすればいいか」という題名の記事が出て、女性の家族と知り合うべきというメインの回答であった。なぜなら経済的に力がなくて社会的な地位が高く

ない女性がいまだに家族に頼っているのだ。確かに、ウクライナの女性人口は53.7%で国の全体の労働力の47.4%も占めている。その内大学卒は60%で、給料は男性より30%少ないところも多く、家や車など個人資産を持つ女性が増えつつありながらも、そのキャリアにおいて「ガラスの天井」にぶつかって上に⁽⁶⁴⁾行けなくなるのが現実である。そして2014年以降の経済危機で隠れ失業者の80%はどれも女性である。就職の時、35歳過ぎでまだ小さい子供がいたら就職も難しいのだ。また、シングルマザーや離婚した子供を持った女性は一般的に「荷物が多く」、再婚などが難しいと思われる。最近社会福祉省でジェンダー的な権利を守る部門も出来て、政治家や外務省などの役所で権力ある立場に着いた女性が増え、昔ながらの「見せるための」、「お飾り的な」役割が減りつつある。だがまだまだ平等ではないところがたくさん残っていて、昔ながらの「女だから」という、古き社会的「規範」の思想の圧力から抜け出すための経済的・精神的な力が不足している女性もたくさんいる。

だがウクライナがいつまでも鉄のカーテンの後ろに生きているわけではなく、外国を旅し勉強や研究をしてくる人も増え、他の国での女性の事情を見てきてフェミニズム論を学んでくる人も増えてきている。つまり型から外れた女性、またそこで新たなロールモデルを生み出す女性が増えた。

そして現在ウクライナ社会で一所懸命活躍する女性のほとんどは、ほぼ外国在住や留学、仕事などの経験がある。ウクライナ独立後の最初のフェミニストのソロミヤ・パウリチコとオクサーナ・ザブジコはアメリカの大学で研究し、イレーナ・カルパやターニャ・マリヤルチュックが外国人と結婚しフランスとオーストリアに在住していて、オクサーナ・ルツィシーナはアメリカの大学で教鞭をとっている。また外国をたくさん旅し見て学んだキャバレーの Daukh Daughters、国産品をプロモートしているユリア・サヴォースティナが外国で見た事物をウクライナにも持ってこようとしている。それは女性を含めた若い

(64) Гендерна рівність і розвиток: погляд у контексті європейської стратегії України, Центр Разумкова, 2016.-с.78-79

女性の顔を持つウクライナ：歴史的な伝統，社会規範，メディアでの……

世代がインスパイアされ、「彼女もできる」という意識を育てることにつながる。つまり、女性だからという古い「型」から抜けて、またその「型の制限」を超えた女性が現れ始めた。プライベートでも仕事でも男性と平等の関係にあり、それが「当たり前」であることをアピールしている。そして自分の社会的地位や職業を超えた活動のおかげでウクライナの社会に大きなインパクトを与え、社会その物を変える力になっている。

つまり、今までの「母親・妻」のディスコースに収まらない新フェミニズムの時代がきた。2014年の自尊革命までは「フェミニズム」は悪口のように聞こえて、フェミニストの女性はボーイフレンドがいないから悩んでいるというふうに言われる人もいた。しかし革命への積極的な参加、また戦争にボランティアでいく軍人になった女性、それから国内避難した人の助けをしているボランティアの女性など新しい女性の姿が現れた。そしてそれまでに人の前で話すのは禁止とされている話題（数度の結婚・離婚などを含め）が社会議論につながる文学作品や新聞のページで語れるようになった。

しかし、状況が変わっても、一つ変わらないところもある。それは時代が変わっても、ウクライナ社会が保守的な社会規範であっても、その歴史的、政治的、経済的にきつい状況の中で柔軟に、勇気を持って厳しい変化に対して強く生き延びるエネルギーにあふれ活躍しているウクライナ人女性の姿であり、その変化に付いていけないウクライナ人男性の姿である。自分の国、社会、自分が生きる時代の少し先に立っているウクライナ人女性のリーダーたちには、未だにサポートが不足している。そしてより自信をつけるためにも、女性にとってこれから自分ができる能力や知識を、いかに経済的・社会的な力に変えるかが課題である。またウクライナ人男性、特に小さい町出身の男性は、バランスある社会を築くためにも自分の国の女性の変化を悟り、もっといいパートナーになるために努力する必要がある。

また「結婚していない女は、また母にならなかった女は「成人」ではない」という古い規範のプレッシャーの中で、また新しい時代のトレンドである社会活

動家、ボランティア、歌手・作家として自由に生きて活躍できるロールモデルが生まれている複雑な状況の中で、「女性であることとは何か」と問われるのは国境を超えた最近のトレンドである。ウクライナは昔から活躍した女性で有名な国としての女性の顔を持っている。だが伝統的で今まで利用されてきた家庭を守る母親像、また戦争終了記念博物館にある母国の母像と並んでモダン・フェミニニティーが生まれる瞬間もある。日本の雑誌で「女子力」と呼ばれるものが、2014年以降のウクライナで十分活用されウクライナの社会を変える力になっている。